



## 大地震・大停電 ～災害時支援の実効策を

● NPO 法人ホップ  
障害者地域生活支援センター

代表理事 **竹 田 保**

9月6日未明に発生した北海道胆振東部地震では、消防庁によると9月28日現在、死者41人、負傷者681人（重傷15人、軽傷674人）、住家の全壊186棟、半壊539棟、一部破損5034棟という甚大な被害をもたらした。被災された皆様に謹んでお悔やみとお見舞いを申し上げます。

今回の地震によって苫東厚真火力発電所が緊急停止、他の火力発電所も安全機能が作動したため電力供給が遮断され北海道全域でブラックアウト（大規模停電）が発生した。難病患者や障害者の生活が電気に支えられ生かされていることを痛感するとともに、停電によってもろくも崩れ去ってゆく生活基盤の脆弱さを改めて知らされた。

私が所属する団体（ホップ）では、95年1月の阪神大震災で避難所にいる障害者の移送活動に使用する車両貸与を行った。障害者、高齢者等は災害時により多くの困難を抱える。震災で避難所のトイレを使用することが出来なかった為に毛布の中で周囲の目を避け、紙おむつで排泄を済ませていた。せめてトイレだけでも負担軽減出来ないだろうか。それ以来ホップでは災害支援活動を行っている。震災後幾多の災害が発生したが、被災による災害弱者の困難は軽減して来たと言えるのだろうか？

今回、私は自室で就寝中に強い揺れを感じ目覚めた。揺れが落ち着きテレビをつけると速報ニュースで強い地震が発生したことが伝えられていた。数分後、停電となり側にあったラジオから全道的な停電を知ったが根拠もないのに数時間で直ぐに復旧するだろうと思い込んでいた。停電が復旧したのは翌7日18時半が過ぎてからエレベーターが動いたのは

8日早朝となり、この間、マンション7階の自宅から外出することも出来ず、停電、断水の中、軟禁生活を体験した。

電動ベッド、電動車椅子、電動歯ブラシ、鼻マスク人工呼吸器、カフマシーン、パソコン、携帯電話と実に多くの電気器具に支えられて生活している。今回のブラックアウトでは電動ベッドの背もたれを起こしている時に停電となり横になることが出来なくなった方や人工呼吸器のバッテリーがいつ途絶えるかという不安と恐怖の中で、救急車の到着を待つ病院へ緊急入院したなど数え切れないほどの停電を原因とする課題が噴出した。通常、災害時には3日程度の備えが必要だと言われ食料や飲み水の準備をされている方もいると思うが電気については数時間だと思い込んでいた人が大多数だったのではないかと。今後は製造販売業者も含めて3日程度停電対策は必要だと思う。医療用具や補助器具の多くは保険、税金などの公費によっている。対象品目の仕様に停電対応を付記する必要があると思う。公費によって事業を行うものにはより安全を担保する自覚が求められるのではないかと。

災害発生直後、各地に避難所が開設され、難病患者、障害者を含めて多くの方が避難した。私は自宅マンションが7階でエレベーターが停止していたために自宅待機を選択した。避難にあたって人工呼吸器、吸引機、ミキサーなどの電源確保、硬い床での褥瘡への不安、皮膚疾患などの清潔保持など様々な理由で一般避難所へ不安を感じて福祉避難所を希望し直接問い合わせた方もいたようですが、情報を公開すると混乱を招くので一旦近くの避難所へ避難するようにとの対応で避難を断念した人もいた。またバッテリーが持たず電源確保のために救急車で病院へ緊急入院したとも聞く。福祉避難所の課題を明白にして解決策を探るべきだと思う。

アパートなどで一人暮らしをしていた難病患者や障害者はこの間をどのように過ごしていたのだろうか？現在、関係団体と協力して調査を行っている。災害時の支援がどうあるべきか、具体的な実効策が求められる。